國學院大學学術情報リポジトリ

The Spread of Togawa Sennindo Worship

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sato, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000383

外川仙人堂信仰の展開

佐藤　優

はじめに

出羽三山信仰の研究は、戸川安章の一連の研究を中心に[1]、岩鼻通明[2]や宮家準[3]などによって、多様な信仰的特質がこれまで明らかにされてきた。その中で岩鼻は、近世の出羽三山参詣「旅日記」を分析し、「近世期の社寺参詣全般が循環的行程を有していた」という仮説を提示した。そして、この構造は「社寺参詣の旅を「物見遊山」に終始させることなく、また社寺の聖性の喪失を回復すべく創意せられた[4]」ものとしている。

ところで、近世の出羽三山参詣を考える上で注目されるのが、山形県最上郡戸沢村大字古口（ふるくち）に鎮座する外川仙人堂である。というのは、この社が出羽三山参詣者の拝所として[5]「羽黒道者錫杖振りはじめの社」と位置づけられており[6]、千葉県及び神奈川県横浜市にも出羽三山信仰と関わる形で勧請されたことも指摘されている[7]からである。これら先学の研究を受け、筆者も享和三年（一八〇三）に仙人堂が版行した略縁起を分析し、横浜への勧請経緯について考察を加えたことがある[8]。

こうした研究から外川仙人堂は、出羽三山信仰と関わりながら信仰されてきたことが見通せる。また、地域ごとの信仰実態

も各報告によって明らかにされてきた。ただ、最上における信仰実態と勧請地域におけるそれとを総体的に把握し、出羽三山信仰との関連性についても目配りしながら、この信仰の展開について論究した研究は少ないといえる。

そこで、本稿では、外川仙人堂の近世期から現代までの信仰的展開を論じてみたい。具体的には、社への奉納物や落書及び仙人堂を管理していた修験者が版行した略縁起と略絵図を分析し、外川仙人堂の近世期から現代までの信仰的展開を把握してみる。そして、勧請地域の各事例を検討し、この信仰がいつ頃広まり始め、勧請地域にどのように定着したのかを明らかにしてみたい。こうした作業は、出羽三山信仰の多面性の一端を明らかにできると考えられる。また、近世期外川仙人堂は、常陸坊海尊を祭神とする伝承もあり[9]、これを考察する上での基礎研究として本稿を位置づけておきたい。

一、信仰する人々と仙人堂

外川仙人堂信仰史を追尋していく史資料は、『資料集』としてまとめられている[10]。その多くは、仙人堂を信仰する人々からの奉納物や社殿への落書であり、奉納者と記載者は先述したように出羽三山参詣者が多数であったことが想定される。よって、仙人堂に遺された史資料を分析する場合、出羽三山参詣が隆盛を極めた背景と参詣実態をふまえた議論が必要であり、「寺社側の動向及び参詣者の相互規定の中において論ぜられる」[11]べきでもあろう。

そこで、本節では、外川仙人堂への奉納物と落書を中心に分析し、この信仰の展開を歴史的に跡づけてみることにする。その具体的作業として、先程取り上げた『資料集』と筆者の調査[12]から得られたデータに基づき、表1「外川仙人堂境内奉納物及び落書年表」として整理してみた。この表に則しながら検討を加えてみよう。

全三九事例をみてみると、奉納・記載時期として五つのまとまりが指摘できる。年代順に列挙してみると、①宝暦三年（一七五三）から宝暦九年（一七五九）までの三例、②天明六年（一七八六）から文化二年（一八〇五）までの一〇例、③天保十一年（一八四〇）から天保十三年（一八四二）までの四例、④安政四年（一八五七）と慶応二年（一八六六）の二例、⑤明治十一年（一八七八）から平成七年（一九九五）までの二〇例となる。

①の時期で注目される奉納物は、石鳥居である。願主は、三

表１　外川仙人堂境内奉納物及び落書年表

事例番号	種別	奉納・記載年月日	奉納・記載者	内容概略及び備考
1	絵馬	宝暦３年（1753） ７月吉日	江戸四谷内藤新宿 永井屋七右エ門 江戸木挽町五丁目	唐人かなえを捧げる図。
2	絵馬	宝暦８年（1758） ７月吉日	江戸四谷内藤新宿 永井屋七右エ門	神馬。
3	石鳥居	宝暦９年（1859） ７月吉日	新庄　願主 三原清太夫と弟子の安住	石鳥居。高さ＝３メートル65センチ。
4	拝殿落書	天明６年（1786） ６月８日	最上大石田 庄司善兵衛	上記の内容のみ
5	拝殿落書	天明６年（1786） ７月15日	庄内酒田　木内□町 阿内　六之助	上記の内容のみ
6	拝殿落書	天明８年（1788） ５月26日	大熊助吉 岡野外八郎	上記の内容のみ
7	拝殿落書	天明８年（1788） ６月16日	出羽庄内酒田稲荷小路 佐藤在之介　其部勘蔵	上記の内容のみ
8	拝殿落書	寛政元年（1789） ５月吉日	関東常陸国真壁郡下妻町 渡邊四郎兵衛　六十七歳	上記の内容のみ
9	拝殿落書	寛政８年（1796） ４月27日	武陽　三好氏 羽柴橋　鴨田氏 白岩　伊右エ門 諸国巡国　上野氏	上記の内容のみ
10	拝殿落書	寛政11年（1799） ６月11日	九州筑前国遠賀郡芦屋町 きの国や　藤右エ門	上記の内容のみ
11	拝殿落書	享和２年（1802） ８月３日	仙台涌谷町 扇屋利惣吉	上記の内容のみ
12	天狗面	享和３年（1803） ６月吉祥日	願主 常州那珂郡上小瀬村　堀江政市 同村　橋本弥兵衛作之	鼻欠け天狗面（縦＝42センチ、横＝32センチ）
13	拝殿落書	文化２年（1805） 11月５日	大泉藩　平林氏　甲武行　石原氏	上記の内容のみ
14	縄術掲額	天保11年（1840） ４月吉日	福嶋流縄術　姉崎喬直門人	笹原豪大夫展英ほか13名
15	金的掲額	天保11年（1840） ５月吉日	日置流道雪派 児玉武膳義陳門人 馬場元治郎信恭	上記の内容のみ
16	常夜燈	天保12年（1841） ２月吉日	世話人　山形　三浦権四郎　他14名	船中安全の為のもの。奉納者は、三浦の他に山形・大石田・新庄・古口・酒田の紅花を扱う商人・船持・荷問屋
17	常夜燈	天保13年（1842） ５月	庄内清川　斉藤治兵衛	上記の内容のみ
18	金的掲額	安政４年（1857） ３月吉日	日置流道雪派 水原良蔵親暢門人	可児久次郎長盛ほか25名
19	金的掲額	慶應２年（1866） ８月吉日	日置流道雪派 水原良蔵親暢門人	小山志津江良歖ほか11名
20	絵馬	明治11年（1878） ８月吉日	最上郡新庄五日町村山中米蔵　渕斎筆	貴人白糸の滝を見る図
21	絵馬	明治23年（1890） 旧８月吉日	羽前国西田川郡鶴岡町　大字最上町 加藤傳之助父	参詣絵馬

事例番号	種別	奉納・記載年月日	奉納・記載者	内容概略及び備考
22	奉納剣	明治27年（1894） ７月吉祥日	宮城県陸前国栗原郡柳岡村　高橋重左衛門敬白	念願成就奉納剣
23	絵馬	明治27年（1894） □月吉日	山形県東田川郡渡前村　成沢喜之助 金之助絵	参詣絵馬
24	天狗面	明治28年（1895） ７月19日	山形県飽海郡田沢村大字山元 阿部夘之七	鼻高天狗面（縦＝43センチ、横＝33センチ）
25	絵馬	明治28年（1895） ７月吉日	横山村　遠藤與七	船絵馬、長久丸
26	絵馬	明治28年（1895） 10月吉日	西田川郡東郷村大字成田新田　小林喜平治	参詣絵馬
27	絵馬	明治34年（1901） 旧７月吉日	山形県西田川郡東郷村大字成田新田 願主　青山五郎太	風景絵馬
28	奉納剣	明治40年（1907） ５月	東田川郡東栄村関根　願主　玄渡与平治	上記の内容のみ
29	落書	明治41年（1908） ９月14日	歩兵第69聯隊甲種　越中国滑川町大字中町１丁目 石倉秀達　61才	第135番とある
30	絵馬	大正元年（1912） ８月吉日	兵庫県城崎郡奈佐村内福城寺村　岡田チエ乃 群馬県前橋市　母マキ　27才　長沼与助　２才 富山県柿井郡音川村　松田良　37才 女　スヨ子　34才 新潟県古志郡六日市村字妙見　坂詰関造　40才	上記の内容のみ
31	神鏡	大正13年（1924） ７月７日	飽海郡日向村大字赤利　兵藤子之助 東田川郡十六合村千本杉　石川藤助 作者　平野出羽守	上記の内容のみ
32	天狗の足駄	昭和２年（1927） ７月１日	東田川郡大和村 廻館昭元会	一本歯の下駄。形態＝縦＝26センチ、横＝20センチ
33	絵馬	昭和２年（1927）	東田川郡斎村大字斎藤川原　門脇鶴蔵	奉納扁額
34	絵馬	昭和４年（1929） ８月１日	東田川郡黄金村大字寿　金内理治 原田多三郎	神社図
35	奉納足駄	昭和39年（1964） ４月吉日	大字小中島有志一同	鉄製の足駄
36	奉納幟	昭和54年（1979） ８月吉日	東京中野　新井清　ヨエ子	「奉納外川仙人神社」と墨書されている。
37	奉納幕	昭和58年（1983） ８月吉日	東京中野　新井清　ヨヰ子	紫色の奉納幕
38	奉納賽銭箱	昭和58年（1983） ８月19日	戸沢村古口　佐藤仁三郎　戸沢村柏沢　齋藤源一	奉納賽銭箱
39	奉納幕	平成７年（1995） ５月吉日	外川神社保土ヶ谷講中	梅鉢紋が施された紫色の奉納幕。

※筆者の調査及び大友義助編『戸沢村史編集資料』第１集（山形県戸沢村教育委員会、1984年、52－70頁）掲出資料に基づいて本表を作成した。

原清太夫と弟子の安住である。石鳥居の形態から三原の仙人堂に対する強い信仰心が見て取れよう。新庄藩士であった三原は、宝暦年中に勘定頭の重職を勤めたが、不調法により謹慎を仰せつけられたようだ。[13]

では、この時期の仙人堂は、どのような利益があったのだろうか。同じ宝暦年間（一七五一―六四）の編纂とされる[14]『新庄領村鑑』（以下『村鑑』と略記）をみると「仙人権現者川舟の災難を救い（ママ）守らせ給ふ御神なり、虫を嫌ひ給ふが故に境内壱里□山の木の葉に虫のつく事なし、是によつて虫の病を愁ふる人々者信心を発して祈願すれば其験し有事[15]」という二つの利益が示されている。

最初の「川舟の災難を救い（ママ）守らせ給ふ」という利益については、③の時期の常夜燈奉納とも関わるものであろう。事例16は、最上川流域の舟運、特に紅花の配送と関わる人々からの奉納である。[16]17は、庄内藩領清川村の富豪が奉納したものであり、彼も最上川の舟運と関わる人物とされる。[17]常夜燈が奉納される理由は、この地が舟の難所だからであろう。それは、『村鑑』にも「難所数多有り[18]」と示されている。また、山から吹き降りてくる突風は、舟の帆を折り、隠れ岩も無数にあるため破船を多数出していた。さらに、舟の遭難は、人命だけでなく紅花や米穀などを送り出した商家の浮沈に直結する大事であったようだ。[19]

常夜燈の奉納は、「川舟の災難を救い（ママ）守らせ給ふ」という仙人堂の特異な利益が、最上川の舟運関係者に広まっていた証左としてとらえることができる。そして、この利益は、近代になっても保持されたことが、事例25をみると理解できる。最上川流域にある寺社への船絵馬奉納は、最上地区において仙人堂の事例しか現時点で確認できない。[20]このような事例から、仙人堂は、最上川の舟運と結びついて信仰されてきたといえる。

さて、「虫の病を愁ふる人々者信心を発して祈願すれば其験し有事」という利益については、以下に示す史料が参考になる。

當村熊野山星福寺境内仙人権現者虫積（ママ）消滅守護之神にして同寺観雄法印有時積（ママ）之病にて悉難儀いたし出羽の國仙人権現江祈願をこめ候処病苦忽愈（ママ）あり因茲仙人権現を寫勧請ありし候処遠近之輩虫積（ママ）ニて難□之もの尋来心願いたし候處忽病苦全快依而参詣之輩多く乍去是迄宇房無之今般御隣村之他力助成ヲ以一宇建立仕度無餘儀御願申入候間多少ニよらす御寄附被成下候様奉希候以上

セハ人

青鹿忠右衛門㊞
並木金右衛門㊞
同　傳左衛門㊞
長島直五郎　㊞[21]

弘化四未年
十一月

現在の埼玉県加須市にある星福寺の観雄法印が、癪の病を鎮めるために出羽の仙人権現に祈願したところ、病が癒えたのでこの権現を勧請したことが記されている。

熊野山星福寺は、現在真言宗智山派に属し、阿弥陀如来を本尊とする。[22]そして、近世から近代にかけて編纂された地誌類における星福寺の項目に観雄法印と仙人権現の記述を見出すことはできない。[23]ただ、この史料の内容から、「仙人権現」は、外川仙人堂である蓋然性は高いといえ、疳の虫除けの利益も広く信仰されていたとみられる。続いて、近世期最も事例数が多い、②の時期を中心に検討してみよう。

ここで目立つのは、仙人堂拝殿への落書である。まず、事例4・5・7で示した落書は、大石田及び酒田在住の人物が書いたものであるが、8は常陸国真壁郡下妻町（現在の茨城県下妻市）からの参拝者が記したものである。また、10の落書は、筑前国遠賀郡芦屋町（現在の福岡県遠賀郡芦屋町）の者が残したものであり、11のように「仙台涌谷町」（現在の宮城県遠田郡涌谷町か）から来たことを示す落書も確認できる。これらの落書は、遠隔地からの参拝者が複数いたことを示す資料といえよう。

さらに、12で示した「鼻欠け天狗面」の奉納もみられる。この面の願主と制作者は、現在の茨城県常陸大宮市上小瀬地区在住の者であり、面はそこで制作され最上の地まで運ばれたとみてよいだろう。奉納者にとって仙人堂は、信仰対象として明確に意識されており、地元以外の地域に信仰が拡大したことを示す資料としてこの面をとらえることもできる。では、遠隔地に住む人々が、仙人堂を知るきっかけとは何か。それは、やはり出羽三山参詣がまず想起されよう。

宝永六年（一七〇九）の記録をみると、この年は出羽三山の縁年に当たる丑年なので、通常よりも参詣者が多いようだが、六月十四から六月二十七日までに最上川清水河岸（現在の山形県最上郡大蔵村清水）で休息した出羽三山参詣者は、一〇四二三人もいたことがわかる。[24]わずか一三日で一万人を超える人々が出羽三山へ向かったということは、出羽三山信仰がいかに広く浸透していたかを物語るのに充分な人数であるといえよう。

また、参詣ルートとしてはいくつか指摘されているが、[25]大石

田や清水河岸を経て古口で継船しながら清川まで下り、そこから陸路で三山を目指すものも今示した記録以外から確認できる。例えば、文政八年（一八二五）六月四日に現在の千葉県袖ヶ浦市奈良輪より出立した『北国道中記』六月十九日条をみると、古口より清川まで船を使い、仙人堂の前で「虫おさへ御守出」たことが記されている。[26] また、③の時期に当たる天保十一年（一八四〇）六月十七日に袖ヶ浦市蔵波から出立した『奥州道中記』七月四日条にも、古口から清川まで乗船したとあり、「一、外川仙人大権現参詣　虫除守拾弐銅」と記録されている。[27] このように三山参詣者は、古口から清川まで舟で下り、その途中で仙人堂の前を通過し、「虫除」の守札を受けたことが確認できる。

近代になると事例30のように兵庫・富山・群馬・新潟の人々が連名で奉納している。また、22では宮城県栗原郡から剣が奉納されており、29では富山県の軍人が記した落書も確認できる。さらに、事例36・37・39のように近年になっても東京や横浜在住の人々からの奉納物が認められる。こうした事例は、現在も多様な地域の人々から仙人堂が信仰され続けていることを示している。

さらに、近世から近代にかけて共通する特異な奉納物としては、「天狗」関連のものが注視される。仙人堂には、先に示した事例12の「天狗面」と奉納者・奉納年月日が未記載の「鼻曲り天狗面」もあることから、近世から近代に天狗の伝承があったことが推される。この伝承は、常陸坊海尊と結びつけられている事例も確認できる。[28]

また、32は面ではなく足駄であり、35も鉄製の足駄であった。足に関する利益を記した文献は、管見の限り確認できない。しかし、仙人堂の対岸にある高屋（たかや）地区は、最上峡が一番狭まった地域で、広い水田を耕作できる土地はなく、地域の主な生業は炭焼きと畑作であった。こうした地域性から高屋において仙人堂は、舟の除災と足への利益をもたらす神として信仰されていたようだ。[29]

ところで、現在仙人堂の地元において出羽三山と仙人堂を関連づける行事として「サンゲサンゲ行事」が注目される。山形県最上地方を中心としておこなわれている「サンゲサンゲ行事」は、出羽三山信仰あるいは作神としての山岳信仰を背景に持つとされる。行事内容としては、一家の主人が旧暦十二月一日から八日まで村の行屋に籠もり、別火精進を重ね、朝夕三山拝詞を唱和しながら一年の罪状を懺悔し、明くる年の豊作を祈願するという。[30] そして、仙人堂が鎮座する戸沢村古口地区の鎮守白山神社では、毎年一月七日前後にこの「サンゲサンゲ行事」を

現在でもおこなっており、その中で次のような拝詞が唱和される。

綾瓊綾瓊　久奇尊登　月山神社乃御前乎　拝美奉留
綾瓊綾瓊　久奇尊登　湯殿山神社乃御前乎　拝美奉留
綾瓊綾瓊　久奇尊登　出羽神社乃御前乎　拝美奉留
綾瓊綾瓊　久奇尊登　外川神社乃御前乎　拝美奉留
綾瓊綾瓊　久奇尊登　白山神社乃御前乎　拝美奉留(31)

この拝詞から現在も古口地区では、出羽三山と外川神社を関連づける意識を保持していることがわかる。(32) 外川仙人堂と出羽三山信仰の関わりについては、より細やかな考察が必要だと考えられるので、次節以降さらに検討を加えたい。

以上、本節では、社への奉納物及び落書を中心に分析してみた。利益としては、近世から明治期までの地域における物資の輸送及び交通の要であった最上川の舟運に携わる人々から川舟の厄難除災として信仰を集めていた。そして、疳の虫除けの神及び地域の生業とも関わりながら信仰されていることも確認できた。また、古口地区では、出羽三山と関わる社として現在も意識されていることが「サンゲサンゲ行事」から見通せた。そこで次節では、こうした意識の醸成に関与したと考えられる仙人堂の管理者寿命院が、この社をどのように位置づけながら信仰を展開していったのかについて、略縁起と略絵図を分析しながら考察を進めてみよう。

二、寿命院が版行した『略縁起』と「略絵図」

近世期、仙人堂が鎮座する古口村は、『村鑑』によれば「沓喰　大戸川(ママ)　小戸川(ママ)　高屋　土湯　三ツ沢」の枝郷があり、仙人堂は小外川にあった。また、外川山の山号を持つ寿命院と仙学坊という羽黒派修験二坊が確認できる。(33) 古口村の修験は、寛永十五年（一六三八）以降、羽黒山の山上衆徒三十一院の一つ「威徳院」の支配下にあったとされる。(34) よって、寿命院は、威徳院配下の羽黒修験として仙人堂を中心に宗教活動をおこなっていたと考えられる。そして、享和三年（一八〇三）に『羽州最上村山郡外川山仙人堂略縁起』（以下『略縁起』と略記）を版行した。では、寿命院は、『略縁起』の中でどのように仙人堂を規定していたのだろうか。

この『略縁起』については、以前に本文の翻刻をおこない、考察を加えたことがある。(35) ここでは、より詳細にその内容につ

いて検討してみたい。まず、『略縁起』の概略を列挙してみよう。

Ⅰ　中昔、仙人の流れを汲む仙人大権現という異人がいた。

Ⅱ　この異人は、羽黒山を開山した能除太子が川舟の危難を嘆き悲しみそれを救うため、外川の異人として化度した。そして、仙の蜜法を修めたのち、一宇の堂を建立した。それが今の仙人堂である。

Ⅲ　利益は、水難を守護し、五穀成就、諸病退散、小児虫除けである。

Ⅳ　仙人堂の下司（しもつかさ）は、小舟に幣束を捧げて川に出て、最上川を上下する旅客に守札を授与する。その際旅客が、下司の船中に投げ入れた初穂料が、あやまって川の中に落ちてもそれが自然と仙人堂に集まってくるという。

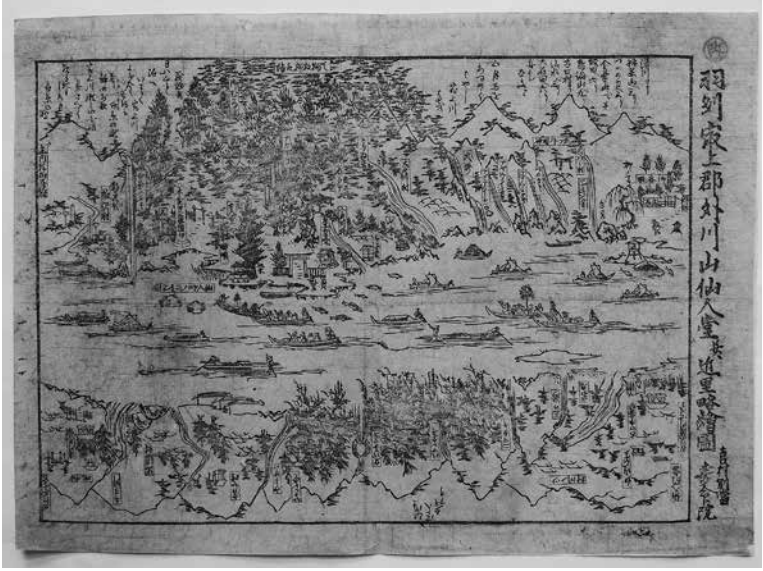
『略縁起』において仙人大権現は、最上川を行き交う船舶の危難を憂えた能除太子の化身とされる。この能除太子は、『神道集』「出羽国羽黒権現事」において羽黒山を開いた人物とされている。[36] また、『略縁起』の表紙には、仙人堂の本地仏として十一面観世音が明示されている。羽黒山の本地仏が聖観音であることを考え合わせるならば、この『略縁起』は、仙人堂と羽黒山との結びつきを主張したものになっているといえる。

次に、利益は「水難守護、五穀成就、諸病退散、小児虫除け」とある。「五穀成就」とあることから、作神としての利益があるとされる。また、「水難守護」及び「子どもの疳の虫除け」も前節で指摘した同種の利益を主張していたことが見て取れる。さらに、『略縁起』は、Ⅳで示したように守札授与に関して特異な伝承を記している。この伝承は、天明九年（一七八九）に「江戸本材木町　壹丁目　西宮新六」より版行された寿鶴斎撰『東国旅行談』巻之二でも触れられているので、引用してみよう。

（前略）仙人堂に一つの不思議あり。この川水はやきゆゑ、船にのり合はす旅人、かの堂へ上（あげ）る賽銭（さいせん）を船中より陸（くが）へ投げんとして、みな川中へ落とす。一夜の中にこの堂のまへに石垣あり、この所へ賽銭おのづから上るなり。昔より今にかはる事なし。[37]

こうした仙人堂にまつわる不可思議な伝承は、仙人堂の特異性を示すものとして理解できる。さらに、『東国旅行談』が、江戸で版行されていることも見逃しがたい。仙人堂信仰の概略

とそれにちなむ伝承が、江戸市中やそれ以外の人々にも広く伝えられ始めたのであった。そして、その時期が前節でふれた②の時期と一致している。寿命院は、こうした伝承も巧みに取り込みながら『略縁起』を制作したといえる。加えて寿命院は、仙人堂を含む近隣の絵図「㊙羽州最上郡外川山仙人堂并ニ近里略繪圖」（以下「略絵図」と略記）も版行していた。次に検討してみよう。



【図版】鶴岡市郷土資料館蔵
「㊙羽州最上郡外川山仙人堂并ニ近里略絵図」

この「略絵図」は、鶴岡市郷土資料館に現存している[38]。版行年は記されていない[39]。絵図をみると、中央部には最上川が描かれており、帆を張っている上り船が五艘、帆を張らず荷を積んだ船が一艘描かれている。また、下り舟も七艘みえ、筏も二艘川面に浮かぶ。中央右に描かれた舟には、榊のような木を船中に立てているものがある。これは、出羽三山参詣者を乗せた舟であろう。立ててないものは、旅行者などそれ以外の人々を乗せた舟と考えられる[40]。

また、仙人堂の前には、幣束を掲げた舟がみえる。その舟から隣の舟に何かを渡している様子も描かれている。これは、『略縁起』の「仙堂の下司ハ小舟に棹し小仙は白幣をさゝげて客舟へ守札御符を授与よす[41]」という記述と対応する。加えて、先に示した『東国旅行談』でも「堂守の修験者は、杉の木の大丸太を舟の形に彫りたる長さ三間ばかりなるに乗りて、大杓子の如くなる物を楫として、旅人の船に漕ぎよせ、纜をもやひて御礼御符を授けあたふ[42]」様子を描出したものとしても理解できる。

さらに、「略絵図」中央右端の「柳ノマキ」では、四つ手網で漁をする様子が描かれている。捕れる魚は「柳巻の子籠り鮭」といわれ、新庄藩から幕府へ献上品とされた。こうした事情から最上峡の鮭は、近世期一般の捕獲が禁止されていたようである[43]。さらに、この鮭にまつわる興味深い伝承が、安政六年（一八五九）成立の『五百津鉏』に記されているので引用してみよう。

最上河の左岸なる外山（ママ）村の山上にあり所祭常陸坊海尊の霊なりといへり一云青麻権現の離宮ともいへり一云最上河の鮭魚の種子は昔外山（ママ）神木通蔓につなきて何方よりか齎らし来て河中に散かし給へり』といへるは正伝なるへし（以下略）[44]

著者である照井長柄（文政二年―明治二十二年）は、鶴岡の蘭方医であり国学者であった。照井は、仙人堂が鮭を産み出す神としての見解を示し、同じ常陸坊海尊の伝承を持つ青麻権現とも関連づけていた[45]。

そして、「略絵図」には最上峡の風景だけが描出されているだけではなかった。『義経記』の中で義経や静御前が詠んだとされる和歌や芭蕉の有名な発句を上部に文字で掲出していることがわかる。これは、「略絵図」を見る者に、歴史や古典世界への想像力も刺激する機能を有していたと考えられる[46]。『略縁

起』や「略絵図」を出羽三山参詣者やその他の旅人たちが持ち帰ることにより、最上以外の人々に対しても仙人堂が、宗教性はもとより歴史と文芸及び幻想的な景観が集約された地に鎮座している神であることを鮮明に印象づけたと思われる。

以上、本節では、外川仙人堂の別当であった寿命院が版行した『略縁起』及び「略絵図」を中心に分析してみた。『略縁起』は、羽黒山との関係を説きながら、伝承的要素も加味して独自の宗教的な環境を喧伝していた。さらに、「略絵図」が仙人堂を取り巻く「環境」を絵や文字で提示していたことは重要である。神が住まう「聖なる場」としての特異性はもとより、歌枕の地、風光明媚な名所、義経と関わる伝説の地など多様なイメージを人々に喚起させながら信仰的展開を遂げていったことを「略絵図」は示しているといえる。そこで、次節ではその事例の一つとして横浜市保土ヶ谷区の外川神社を取り上げ、信仰の広まり方を考察してみよう。

三、横浜の外川神社

神奈川県横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町に鎮座する外川神社は、地元の出羽三山講の講元であった清宮與一が、明治二年（一八六九）に外川仙人堂を勧請したとされる。[47]

ところで、神奈川県下には、出羽三山塔が九一基確認されており、[48]その中の一基として文化七年（一八一〇）建立の「湯殿山供養塔」が外川神社境内近くに現存する。この供養塔の右側面には、次の文字が記されている。

羽黒山正穏院講中
江戸年子　大乗院　川崎村講中
羽根田村　本覺院
塚越村　法隆院
東叡山御持
國先達　苅部市右衛門
清宮又左衛門
石田長左衛門
山先達　長傳坊[49]

「羽黒山正穏院」とは、羽黒山上衆徒の中でも最上位格、華厳院・智憲院と併称される三先達に入る坊であり、山上にあって慈恵大師堂を管理していた。[50]出羽三山内における関東地方の位置づけについてみてみると、「関東八カ国は「檀那場」と呼ばれて、別当宝前院、三先達（華厳院・正穏院・智憲院）、荒

沢三宿（経堂院・北之院・聖之院）が在庁権を有して、それぞれが独自に道者引を送って回檀させた[51]」とされる。近世末期の嘉永二年（一八四九）の時点で正穏院には「大仙坊・円清坊・神力坊・長円坊・三光坊・長伝坊・長慶坊・源正坊」という道者引がおり、関東からの三山詣での際に先達として道者を導き、各檀那場を廻り配札や参詣への勧誘をおこなったようである[52]。「湯殿山供養塔」記載の「山先達　長傳坊」は、三先達「正穏院」配下の道者引であり、この修験が保土ヶ谷の出羽三山講の活動に関与していたと考えられる。また、「國先達」の一人である「清宮又左衛門」は、外川神社を勧請した清宮興一の曾祖父に当たる人物であり[53]、供養塔の背面には興一の父「清宮権兵衛」も願主として記載されている[54]。よって、近世後期の清宮家は、代々出羽三山を信仰していたといえるだろう。では、この社の利益について、次の資料をみてみよう。

明治二年に、此宿内に羽州湯殿山の講中があつたんだ、先達の清宮興一といふ男が出羽の三山、即ち月山羽黒湯殿の三山を巡拝した時、羽黒山麓の外川仙人大権現の分霊を勧請して、自分の邸に祀つたのが抑もの始めで、子供の虫封じ、航海の安全、それらを祈る者が遠近から押しかけてる来る。（中略）とても巨きな草鞋が奉納されてゐるのも、足が達者になるようにといふ祈願だらう[55]。

「子供の虫封じ」への利益については、明治時代ごろまで現在の横浜市港北区日吉に住んでいた人が、子どもの疳の虫除けのために参拝していたようだ[56]。また、「とても巨きな草鞋が奉納されてゐるのも、足が達者になる」とされているところは、地域の環境及び生業と結びつく最上の仙人堂と同質の信仰が見て取れる。

保土ヶ谷の地域的特徴をみてみると、東海道の宿場であり、景勝地として著名な金沢八景に向かう金沢道の分岐点でもあったことから[57]、交通の要地であったといえる。また、この宿場から戸塚宿までは、権太坂など難所が旅人を待ち受けていた。さらに、帷子川（かたびらがわ）河口に位置していたため、開国以降神奈川宿の青木町・神奈川町と並ぶ主要な荷揚場だった[58]。よって、はしけなどの小舟が東京湾と帷子川を往来していたと考えられる。このように健脚を求め、舟の就航安全を求める地域的事情は、最上の地と同じであるといえ、地域の環境や産業に沿う形で信仰が展開していたことが指摘できる。では、仙人堂の勧請事例の多い千葉県ではどのような信仰的広まりを遂げているのだろうか。

四、千葉県の仙人権現

千葉県内において外川仙人堂と関連づけられる石造物は、一二基確認できる。それをまとめたものが、表2「千葉県内の仙人権現関連石造物一覧」である。建立年に着目してみると、文化三年から文久四年までの五八年間に作られていることがわかる。よって、第一節で指摘した②の時期以降、断続的に現在の千葉県内において信仰的展開を遂げていたことが指摘できる。

利益については、子どもの疳の虫除けとする事例が1・3・4・7・12であり、「子どもが生まれた時にお参りする」[59]とする事例2や「集落の子供達の虫神様として信仰」[60]されている事例6などをふまえると、子

表2　千葉県内の仙人権現関連石造物一覧

番号	場所	建立年	備考
1	野田市木間ヶ瀬松ノ木	文化3年（1806）	正面に「仙人権現」と刻字。
2	印西市発作	文政2年（1819）	正面に「仙人大権現」と刻字。2009年8月29日調査。
3	印西市船尾 外川神社内	文政4年（1821）	正面に「奉納仙人大権現」と刻字された石塔。2009年9月20日調査。
4	野田市目吹	文政9年（1826）	正面に「千人大権現」と刻字。
5	我孫子市大字中里	天保2年（1831）	正面に「羽州外川山□仙人」と刻字。2009年8月28日調査。
6	野田市木間ヶ瀬〆切	天保14年（1843）	正面に「仙人大権現」と刻字。
7	印西市船尾 外川神社内	天保14年（1843）	正面に「奉納仙人大権現」と刻字された石塔。2009年9月20日調査。
8	千葉市星久喜町	弘化3年（1846）	正面に「外川仙人大権現」と刻字。2017年4月13日調査。
9	野田市岩名	嘉永2年（1849）	神名は、「仙人権現」。
10	柏市泉（旧沼南町）	嘉永2年（1849）	形状は駒形。正面に「戸川仙人大権現」と刻字。
11	野田市蕃昌	文久4年（1864）	正面に「仙人大権現」と刻字。
12	印西市小林	不明	「ムシガミサマ」と呼称。2009年9月20日調査。

※筆者の調査及び下記に示す①～⑥の参考文献に基づいて本表を作成した。
①飯白和子「出羽三山信仰とムラの人々―旧湖北村を中心に―」（『我孫子市史研究』第6号、我孫子市教育委員会、1987年）
②野田市史編さん委員会編『大殿井・横内・鶴奉・目吹の民俗』（野田市、1998年）
③榎本正三「印西市の湯殿山信仰」（印西市教育委員会市史編さん室編『印西の歴史』第3号、印西市教育委員会、2001年）
④石田年子「野田市の山岳信仰①―石造物に見る野田地方の出羽三山信仰―」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第9号、千葉県立関宿城博物館、2005年）
⑤石田年子「最上川から来た虫神様・仙人権現」（『日本の石仏』第132号、日本石仏協会、2009年）
⑥加藤和徳「最上川から来た虫神様・仙人権現―石田年子氏からの紹介―」（『村山民俗学会会報』第228号、2010年）

どもと関連づけられ、その中でも疳の虫除けに利益がある神として信仰されている。そして、事例3・6・7・12では、「仙人権現」ではなく「ムシガミサマ」と呼ばれてもいることから、[61]利益が「仙人権現」の通称として定着していることがわかる。また、事例3・7がある外川神社は、千葉県神社明細帳にも登録されており、本殿及び拝殿を持っている。例大祭は、毎年一月一五日と八月一五日におこなわれており、印西市船尾地区以外にも船橋市・八千代市・八街市などから参拝者が訪れ、外川神社の守札と合わせて、虫封守と子どものおなかに巻いて虫封じをする麻紐そして、黒色の虫封じの薬及び御祓の幣を受けるという。[62]

ところで、千葉県の人々が仙人権現を知った理由を考えてみる上で参考になるのが、事例5と同一地にある大正七年（一九一八）建立の出羽三山塔である。事例5は、諏訪神社境内にあり、『湖北村誌』によると明治四十一年（一九〇八）十二月二十六日に「天保二卯年三月創建に係る外川神社」を含む五社を当時中里村の村社だった諏訪神社に合祀したことが記されている。[63]よって、これが、事例5とみてよいだろう。現在、この石祠を特別に信仰する様子は、調査の限りうかがえない。しかし、この三山塔は、大正七年当時中里地区において、出羽

【写真】我孫子市中里の諏訪神社境内にある出羽三山塔（2017年８月４日撮影）

三山信仰の体系の中に外川仙人堂が包摂された形で信仰されていたことを物語る資料といえる。[64] さらに、外川仙人堂が、出羽三山を参詣する上で「拝所の一つ」あるいは「羽黒道者錫杖振りはじめの社」として位置づけられていたことを念頭に置くなら、この三山塔は、こうした意識が表出したものとしてもとらえることができる。

さて、この出羽三山塔は、三山講である敬愛講社（講員＝二三名・世話人＝四名・計＝二七名）が建立したものであった。千葉県内の出羽三山塔の建立件数は、五〇二基で、三山以外の信仰が併刻されているものを含めると五九九基にもなること、関東各県の事例全体からみても突出して多いことなどが、西海賢二の調査によって確認できる。[65] また、千葉県内における出羽三山信仰の展開について立野晃は、史資料・聞き取り調査・金石資料などを分析し、通時的な三山信仰の分布域を抽出している。それによると「下総・上総・安房にほぼ万遍なく分布しているが、とくに市原郡域など上総西部地方に濃密である（中略）この地域は、現在でも最も出羽三山信仰が盛んであ」るとし、「逆に空白地帯となっているのが九十九里浜平野中南部一帯などである。この地域には、一円的に日蓮宗が分布しており、（中略）同宗の教義により、出羽三山信仰の流行を認めなかった」と指摘している。[66]

こうした先学の指摘[67]をふまえると、外川仙人堂の勧請地域は、出羽三山信仰も盛行した地域であることが認められる。そこで、先程指摘した三山塔がある我孫子市中里地区の出羽三山信仰の実態について事例を提示してみよう。

中里での出羽三山講は、奥州講と称し、家を継ぐ男子は、講に入り三山に必ず参詣するべきといわれた。話者が参加した昭和三十二年（一九五七）の出羽三山参詣は、講員二十五名くらいのうち一〇名ほどが参った。出立の前に参詣者全員で中里地区の隣、中峠地区に鎮座する足尾山神社に詣でた。[68] その後、餞別をもらい、周遊券を使い鉄道でいった。順路は、まず石巻まで行き一泊し、翌日、金華山に詣でた。金華山は、必ず参拝すべき場所と意識されていた。その後、陸羽西線の狩川駅まで汽車に乗り、そこから手向の宿坊、田村坊までは歩いていった。田村坊は、毎年一一月から三月頃まで千葉県内（市原くらいまで）を巡廻し、お札の頒布及び祈禱などをおこなった。講員が亡くなると、墓にシバを張りにいき、ボンテンを立て、献杯をして冥福を祈った。[69]

このように昭和三十年代ごろまで中里地区では、出羽三山講が組織され、参詣も盛んであったことが確認できた。しかしながら、昭和五十二年（一九七七）くらいを境にして参詣しなくなり、現在は大山講と三峰講以外は、途絶えてしまったようだ。[70]

また、事例8も天明八年（一七八八）から昭和五十三年（一九七八）までに建立された出羽三山塔が、計九基現存する三上神社の境内に鎮座しており、二〇年くらい前まで講を組んで、羽黒山に男子は一生に一度は必ず参拝したそうである。[71]この事例も出羽三山信仰が盛んであった地への勧請であり、出羽三山信仰が、外川仙人堂信仰の展開に深く関わっているといえるだろう。

以上、千葉県内における仙人権現について考察してみた。まとめてみると、子どもと関連づけて信仰されている地域が多く、特に疳の虫除けが利益の中心であった。これは、「ムシガミサマ」という通称にも反映されており、疳の虫除けに利益のある神として信仰が特化されていたことが確認できた。また、仙人が住むような幽境の地をイメージできる最上の地とは異なり、路傍やムラの神社の境内などに石祠として鎮座している場合がほとんどである。こうした形態から鎮座している地域の人々を中心に信仰されている事例が多く見られる。さらに、勧請地域では、出羽三山信仰も盛んであった。よって、三山への参詣が、両所をつなぐ行為として理解できる。出羽三山参詣の途次、仙人堂へも参拝し守札や『略縁起』・「略絵図」などを受けてくることが勧請の契機となった。勧請の後は、出羽三山信仰とは別に、疳の虫除けに利益がある神として地域の中で信仰を醸成していったと考えられる。

おわりに

本稿では、外川仙人堂信仰の展開について、最上の外川仙人堂及び横浜と千葉県内の勧請事例を確認しながら論じてみた。その結果、以下に示す信仰的展開を遂げていたことが明らかとなった。

まず、舟の災難除け及び疳の虫除けが特異な利益として人口に膾炙していたことが確認できた。そして、出羽三山参詣者の拝所及び「羽黒道者錫杖振りはじめの社」という仙人堂への認識は、関東地方からの参詣者が記した道中記の中でこの社を参

拝している記述が複数あること、『略縁起』と「略絵図」の中で守札を配札する様子が描かれていることなどから参詣者及び仙人堂の管理者寿命院双方で意識されていた蓋然性は高いといえるだろう。

また、寿命院は、仙人堂と羽黒山とを結びつける由来を盛り込んだ『略縁起』を制作し、近隣の名所を含んだ「略絵図」も版行した。これは、説話や伝承を考究する上でも見逃しがたい。羽黒山との結びつきという宗教的な事柄だけでなく、賽銭にまつわる不可思議な伝承、最上峡という特異な自然、芭蕉の発句、義経伝説、最上川の出荷舟や三山参詣者を送る舟、「柳巻の子籠り鮭」の漁の様子などを文字と絵によって寿命院は、出羽三山参詣者に提示したのである。三山参詣者はこれを持ち帰り、講中の人々に対し「略絵図」を見せ『略縁起』の文字を追いながら自らの声で信仰及びこうした説話や伝承も伝えたことであろう。信仰や伝説及び地域文化などが、声・文字・図像という三者のコラボレーションによって伝承されたと考えられる。その結果、外川仙人堂は、こうした文献が版行され始めた一八〇〇年前後から幕末期にかけて関東地方など遠隔地において、信仰的展開を遂げたことが本稿において明らかとなった。

翻って、在地神としての仙人堂は、作神や足の神あるいは舟の厄難除災など地域の生業及び産業構造と密接に結びつく形で信仰が展開していたことも確認できた。また、勧請された地域に視点を移すと、横浜の事例では、足の神や疳の虫除け及び舟の除災など最上の在地信仰と重なる形で信仰されていた。これは、保土ヶ谷地域の近世末期から近代における産業及び交通事情と深い関わりがあったことも指摘した通りである。さらに、千葉の事例では、複数の利益を持つ特異な神としてではなく、「ムシガミサマ」という通称が象徴するように、疳の虫除けの利益のみが強く意識され、地域の中で信仰的展開を遂げていたことも事例を通して確認できた。

そして、外川仙人堂勧請地域において出羽三山信仰が、仙人堂信仰の展開に関与していたことも具体的に指摘してみた。講を組織し定期的に最上の地に赴く行為は、仙人堂への参詣にもつながっていた。その結果、関東地方における外川仙人堂信仰は、出羽三山講中が勧請の先導役となり、地域の産業基盤や地理的環境などとも密接に関わりながら、舟の厄難除災や疳の虫除けに利益がある神として次第に定着していったと結論づけられる。

今回は利益を中心に信仰の展開を論じてみたが、今後は「仙人堂」の名称そのものと関わる祭神について検討することで、

この信仰をより総体的に把握できると考えている。こうした作業を経ることで、外川仙人堂の信仰面の展開だけでなく、『村鑑』にも記されていた常陸坊海尊伝説の広がりについても明らかになると思われる。

注

（1）①戸川安章『（新版）出羽三山修験道の研究』（佼成出版社、一九八六年。初出は、一九七三年）、②同氏『出羽三山と修験道』（岩田書院、二〇〇五年）、③同氏『修験道と民俗宗教』（岩田書院、二〇〇五年）など。

（2）①岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』（名著出版、一九九二年）、②同氏『出羽三山の文化と民俗』（岩田書院、一九九六年）、③同氏『出羽三山信仰の圏構造』（岩田書院、二〇〇三年）、④同氏『出羽三山―山岳信仰の歴史を歩く―』（岩波書店、二〇一七年）。

（3）宮家準『羽黒修験―その歴史と峰入―』（岩田書院、二〇〇〇年）。

（4）前掲注2、③書、一六一頁。

（5）大友義助編集・解説『戸沢村史編集資料』第一集（山形県戸沢村教育委員会、一九八四年、一九頁）。

（6）大友義助『仙境・最上峡―歴史と文学―』（戸沢村教育委員会、二〇一六年、一八頁）。

（7）①青木友弥「保土ヶ谷の外川神社―お仙人さま考―」（『郷土よこはま』第一〇五号、横浜市図書館、一九八七年）、②飯白和子「出羽三山信仰とムラの人々―旧湖北村を中心に―」（『我孫子市史研究』第六号、我孫子市教育委員会、一九八七年）、③榎本正三「印西市の湯殿山信仰」（印西市教育委員会市史編さん室編『印西の歴史』第三号、印西市教育委員会、二〇〇一年）、④石田年子「野田市の山岳信仰①―石造物に見る野田地方の出羽三山信仰―」（『千葉県立関宿城博物館研究報告』第九号、千葉県立関宿城博物館、二〇〇五年）、⑤早坂政広『外川神社の歴史』第一巻（自刊、二〇〇五年）、⑥石田年子「最上川から来た虫神様・仙人権現」（『日本の石仏』第一三二号、日本石仏協会、二〇〇九年）。

（8）拙稿「架蔵『羽州最上村山郡外川山仙人堂略縁起』―関東における出羽三山信仰に関する研究ノートと翻刻―」（『世間話研究』第一九号、世間話研究会、二〇〇九年）。

（9）大友義助『最上の伝説』（東北出版企画、一九八一年、一六〇―一六一頁）。なお、海尊伝説の研究については、①野村純一「庚申の夜の客」（野村純一著作集編集委員会編『野村純一著作集』第一巻、清文堂出版、二〇一〇年、三一〇―三三八頁。初出は、一九八四年）、②野村純一「椿は何故「春の木」か―「八百比丘尼」と「常陸坊海尊」―」（野村純一著作集編集委員会編『野村純一著作集』第六巻、清文堂出版、二〇一二年、一三三―一六七頁。初出は、一九八九年）、③拙稿「常陸坊海尊の長寿伝説と信仰―東北地方の青麻神社信仰を中心に―」（『口承文芸研究』第三四号、日本口承文芸学会、二〇一一年）などを参照。

（10）前掲注5書、五二―七九頁。

（11）原淳一郎『近世寺社参詣の研究』（思文閣出版、二〇〇七年、四頁）。

（12）二〇〇九年八月一九日及び二〇一七年五月三日、筆者調査。

（13）前掲注7、⑤書、二四頁。

（14）大友義助「『解説新田本『新庄領村鑑』について」（『郷土資料叢書』第八輯、山形県新庄図書館、一九七五年、五頁）。

(15) 前掲注14書、五二頁。なお、本稿では、『村鑑』の現存伝本の中で寺社縁起について最も詳細な記述を持つ新田本を用いた。また、欠字の部分について、吉田本では「其験あること奇妙也」（嶺金太郎『最上郡資料叢書』新庄市教育委員会、一九七五年、一八六頁。初出は、一九二五年）と記されている。

(16) 前掲注6書、一二―一三頁。

(17) 前掲注6書、一三頁。近世の最上川舟運については、①梅津保一「最上川舟運史研究ノート」（『最上川文化研究』第三号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、二〇〇五年）、②横山昭男『最上川舟運と山形文化』（東北出版企画、二〇〇六年）で詳細を知ることができる。

(18) 前掲注14書、五二頁。

(19) 前掲注6書、一二頁。

(20) 浅黄喜悦「最上川流域に存在する船絵馬について」（『最上川文化研究』第二号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、二〇〇四年、二〇五頁）。

(21) 千葉県立関宿城博物館・小林家文書蔵「外川仙人堂勧請寄付願」（仮題）。

(22) 大利根町教育委員会編『大利根町史　民俗編』（大利根町、一九九九年、五六二頁）。

(23) 『新編武蔵国風土記稿』巻之二一二―埼玉郡之一四（『大日本地誌大系』第一四巻、雄山閣、一九三三年、二七一頁）及び埼玉県編『武蔵国郡村誌』第二二巻（埼玉県立図書館、一九五四年、四五〇―四五一頁）。

(24) 大蔵村史編集委員会編『大蔵村史・史料編』（大蔵村教育委員会、二〇〇二年、三二一―三七・四〇頁）。

(25) 前掲注2、③書、一三三―一九三頁。

(26) 袖ヶ浦町史編さん委員会編『袖ヶ浦町史　史料編』Ⅱ（袖ヶ浦町、一九八三年、二八〇頁）。

(27) 袖ヶ浦市史編さん委員会編『袖ヶ浦市史　資料編一　近世』（袖ヶ浦市、一九九八年、四四〇頁）。

(28) 前掲注9、大友著作に同じ。

(29) 二〇一七年五月五日、筆者調査。高屋地区出身の男性（一九三六年生）からの聞き書き。大友氏は、「虫」について「稲につく病虫害と解されているようである。」（大友義助『最上の山の語り―信仰と伝承―』自刊、二〇〇九年、一七四頁）と見解を提示している。また、戸沢村真柄（まがら）地区の人が、梅雨明けくらいの時期に仙人堂に雨乞いと豊作を願って参拝することが地区の風習として一〇年くらい前まであったそうである（二〇一七年五月六日、筆者調査。古口地区出身の男性（一九三五年生）からの聞き書き）。よって、作神としても信仰されていたと思われる。

(30) 大友義助「山形県北部地方のサンゲサンゲ行事について」（『日本民俗学』第八八号、日本民俗学会、一九七三年、一一頁）。

(31) 前掲注29の話者（一九三五年生）から調査後手紙にてご教示を受けた。

(32) なお、前掲注30論文に挙げられている事例中、戸沢村に隣接する新庄市本合海・同市仁田山のサンゲサンゲ行事において唱和される拝詞の中で出羽三山及び多くの作神と関わる霊山諸山諸仏として仙人堂は呼称されてもいる。

(33) 前掲注14書、五一頁。「仙学坊」については、管見の限り未詳である。

(34) 『神道大系　神社編』第三二巻（神道大系編纂会、一九八二年、四〇九頁）。

(35) 前掲注8論文に同じ。

(36) 『神道大系　文学編一　神道集』（神道大系編纂会、一九八八年、一二一―一二六頁）。

(37) 朝倉治彦編『日本名所風俗図会』一（角川書店、一九八七年、三八九頁）。なお、寿鶴斎という人物については、管見の限り未詳である。

(38) 鶴岡市郷土資料館蔵（請求記号は、「SL4―2」）。版本一枚（裏打

ちが施されている）。料紙は、楮紙。寸法は、縦二九・〇センチ、横三九・〇センチ。この略絵図の分析は、大友義助「「最上郡外川山仙人堂并ニ近里略図」を読む」（『最上川文化研究』四、東北芸術工科大学東北文化研究センター、二〇〇六年、一三―二四頁）及び前掲注6書（七一―七六頁）でなされており、本稿もその記述に拠ったところが多い。

(39) 大友氏は、略絵図の版行時期を幕末頃としている（前掲注29書、一七六頁）。本稿では、第一節における検討及び『略縁起』の版行年を考慮して、一八〇〇年前後を「略絵図」の版行年と仮定し論を進める。

(40) 前掲注38大友論文、一九―二〇頁。

(41) 前掲注8論文、六〇頁。

(42) 注37に同じ。

(43) 前掲注6書、一四頁。

(44) 照井長柄『五百津鉏』（山形県神職会西田川郡支部、一九二一年、一二四頁）。

(45) これと同じ伝承は、藤原相之助「奥州の仙人伝説」（『旅と伝説』第四年第二号、一九三一年、二七頁）でも報告されている。

(46) 羽賀祥二『史蹟論』（名古屋大学出版会、一九九八年、三六〇―三六五頁）。

(47) 前掲注7、①論文、一三頁。

(48) 西海賢二「出羽三山信仰の地域的展開―出羽三山塔の造立から―」（同氏『東日本の山岳信仰と講集団』岩田書院、二〇一一年、九五頁）。

(49) 二〇〇九年七月三一日、筆者調査。なお、摩滅などの箇所は、前掲注7、①論文（二四頁）の翻刻に従った。

(50) 宮家準「近世における羽黒一山」（前掲注3書、八七頁）。

(51) 宮家準「羽黒修験の地方組織」（前掲注3書、一一〇頁）。

(52) 『羽黒町史』上巻（羽黒町、一九九一年、八八九―八九〇頁）。

(53) 注47に同じ。

(54) 注47に同じ。

(55) 栗原清一『舌栗毛保土ヶ谷めぐり』（横浜郷土史研究会、一九三三年、二四頁）。

(56) 二〇〇九年八月二十七日、筆者調査。保土ヶ谷出身の男性（一九三七年生）からの聞き書き。

(57) 斉藤司「解説『東海道保土ヶ谷宿資料集』所収資料について」（『東海道保土ヶ谷宿　資料集』横浜市歴史博物館、二〇一一年、六―七頁）。

(58) 『東海道保土ヶ谷宿』（横浜市歴史博物館、二〇一一年、二二・二八頁）。

(59) 二〇〇九年八月二十九日、筆者調査。

(60) 前掲注7、⑥論文、一六頁。

(61) 事例3・6については、二〇〇九年九月二六日、印西市大森地区在住の男性（一九三四年生）及び同市泉地区在住の女性（一九五五年生）からの聞き書き。事例12については、二〇〇九年九月二〇日、同市小林地区在住の男性（一九五〇年生）からの聞き書き。

(62) 二〇〇九年九月二〇日、筆者調査。外川神社を管理するお宅の女性（一九五九年生）からの聞き書き。

(63) 菅井敬之助『湖北村誌』（湖北村役場、一九二〇年、一六五頁）。

(64) 東日本の出羽三山塔については、西海賢二「東日本の出羽三山塔一覧」（前掲注48書所収）を参照。この中で西海は、岩手・宮城・秋田・茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川の各都県で一四三四基の三山塔を確認しているが、この中に出羽三山と「外川仙人大権現」を併記するものは見出せない。

(65) 注48に同じ。

(66) 立野晃「出羽三山講と行人」（千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史　通史編　近世』二、千葉県、二〇〇八年、八二〇―八二一頁）。

(67) 立野以外の千葉県内における出羽三山信仰の主要な研究は、宮本袈裟雄「関東の出羽三山講」（同氏『里修験の研究』岩田書院、二〇一〇年、二五六—二七四頁。初出は、一九七九年）、岡倉捷郎「関東における出羽三山信仰—その分布と三山講の性格・諸相—」（『まつり』第三八号、一九八一年、一五—四八頁）、菅根幸裕「出羽三山講」（千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史　別編　民俗』I、千葉県、一九九九年、四〇〇—四一〇頁）、川上華子「出羽三山講の研究—木更津市中島の「梵天立て」を中心に—」（『伝承文化研究』第七号、國學院大學伝承文化学会、二〇〇八年、一一〇—一一七頁）、對馬郁夫『房総に息づく出羽三山信仰の諸相』（自刊、二〇一一年）、「房総の出羽三山信仰」映像記録作成委員会編『映像記録　房総の出羽三山信仰　解説書』（千葉県伝統文化再興事業実行委員会、二〇一一年）、小林裕美「梵天に見る房総の出羽三山信仰の現在（いま）」（『千葉県立中央博物館研究報告』第一三巻第一号、千葉県立中央博物館、二〇一二年、一—八一頁）、岩鼻通明『出羽三山—山岳信仰の歴史を歩く—』（岩波書店、二〇一七年、一〇〇—一〇二頁）などがある。

(68) この神社は現在も、足の神として信仰されており（二〇一七年八月六日、筆者調査）、旅の安全を祈願したと考えられる。

(69) 二〇一七年八月六日、筆者調査。我孫子市中里地区在住の男性（一九三七年生）からの聞き書き。話者の祖父は、敬愛講社中の一人であり、芳名も三山塔に刻字されている。

(70) 二〇一七年八月六日、筆者調査。我孫子市中里地区在住の男性（一九五二年生）からの聞き書き。

(71) 二〇一七年四月一三日、筆者調査。星久喜町在住の男性からの聞き書き。